

氏 名：川代知寛

所 属：大学院 農学研究科 生物生産学専攻 2年

派遣先：ガジャマダ大学(インドネシア共和国)

派遣期間：2016/03/07～2016/03/15(8日間)

◆ 日本語教室での指導内容

日本語クラスは平日の午前(10:00-11:30)と午後(13:30-15:00)の2回行った。毎回日本語教室を受講する学生の数や習得レベルが異なるため、適宜ビギナーコースグループ(ひらがなが書けない・読めない)をつくり、対応した。私の場合、3/7-3/8は鎌田と2人で、3/10-3/15は鎌田と松田と3人で授業を行えたため、一人がビギナーコースの学生を担当し、その他でアドバンスコース(日本語である程度の会話が可能)を担当する形式をとった。

表 各授業の指導内容

日付 時間帯	指導内容	備考
3/7 午前	道案内	
3/7 午後	挨拶・数字	ビギナーコース
3/8 午前	欲しい・したい	
3/8 午後	挨拶・自己紹介	ビギナーコース
3/10 午前	自己紹介	会話練習
3/10 午後	できる・できない	ビギナーコース
3/11 午前	東日本大震災	
3/11 午後	大学について	会話練習
3/14 午前	大学生の生活について	会話練習
3/14 午後	形容詞の読み書き使い方	
3/15 午前	アルバイトについて	会話練習
3/15 午後	日常会話・しりとり	

各授業で最も重要視したことは「対話」である。この教室の学生の日本語レベルは非常に高く、十分に日常会話ができる状態であった。しかしながら、助詞や動詞の活用などを正しく用いることは困難であるらしく、そこを自分との対話を通して一つずつ修正していこうと考えた。例えば、「朝でご飯を食べるできました」というような文章を「朝にご飯を食べることができました」と修正しながら会話を進めていった(変な文章だが)。

ビギナークラスの学生を教える際は、1回の授業で会話ができるところまで進めることを重要視した。ガジャマダ大学の場合、日本語教室は強制的な講義でないため、授業の進度よりも日本語教室を楽しんでもらうことが必要である。1回の授業で新しい日本語の会話ができるようになり、私たちとコミュニケーションが取れるようになることが学生の意欲に

つながったと思われる。

◆ 日本語教室以外での現地での交流活動

日本語教室の学生とともに、スーパーマーケットやレストラン、主要な観光地に向かった。バスケットボール、バドミントンなどのスポーツを行い、そこでの会話を通してインドネシア文化を知ることができた。また、サマープログラムに参加したことのある学生や山形大学農学部へ留学していた学生も再会でき、刺激の多い毎日であった。

3/14 の夜にはフェアウェルパーティを開いてもらい、インドネシア人 23 人日本人 3 人の計 26 人で楽しく過ごすことができた。さらに 3/15 には空港まで 14 名の学生が見送りに来てくれ、最後まで彼らのホスピタリティに驚かされた。



◆ プログラムに参加した感想

私がこのプログラムを通して感じたことは 2 つある。1 つは日本語を教えることの難しさである。私らが感覚的にできている助詞の使い分けや動詞の活用を教えることに苦勞し、最後までうまく説明することができず情けなく思っている。普段の何気ない日本語も理論的に説明することは難しく、今後日本語の勉強をしておそうと思った。

2 つ目はインドネシアの文化の面白さである。インドネシアは日本とは違い昔から様々な

民族が入り交じり、その都度新しい文化を取り入れた地域である。国民のほとんどはイスラム教であるが、ジョグジャカルタの観光名所であるボロブドゥール遺跡は仏教遺跡であり、プランバナン寺院群はヒンドゥー教の建造物である。さらにインドネシアには 300 以上の民族と 500 以上の言語があり、日本との違いは明瞭である。こういった背景の中、オランダや日本による統治の時代を乗り越え、現在のインドネシア共和国とインドネシア人がいる。このプログラムを通して、生のインドネシアの生活を見聞することができた。自分の想像していたインドネシアよりもずっと治安が良く(ジョグジャカルタだけかもしれないが)人々は活気があった。日本にはないイスラム文化や南国の気候、インドネシア料理を楽しみながら、常にそばにいてくれた日本語教室の学生に様々な疑問をぶつけ、非常に有意義な時間を過ごすことができ貴重な経験ができたと思う。

◆ 自分の目標の達成度や努力した経緯など

1. 英語力向上→△

これはガジャマダ大学の学生の日本語が想像以上に高く、日本語で会話することも可能であったためである。しかし、日常会話では困らないが複雑な話をする際には英語が必要になる場合があり、その際に英語を使うことで向上できたと感じている。また、担当の先生の紹介などで日本語教室の学生以外と話す場合には英語であったためその際にも使用し、相手の理解力に助けられながら会話をすることができた。日本人にとってインドネシアの方の英語を聞き取る際に苦戦するのが、V の音と R の巻き舌であると思う。

また、意外なところで英語力を向上するきっかけをもらった。担当した学生たちの日本語習得レベルが私の英語習得レベルと同程度であったため、学生たちに日本語を教える際のポイントややり方は自分の英語習得に生かすことができた。例えば、言葉の並び順や前置詞(助詞)の使い方である。日本語を教えながら、英語を改めて勉強することができた。

2. 異文化理解→◎

これは非常に満足いく結果である。事前にインドネシアについてしっかり勉強していて良かったと思う。現地に行ってから時間も時間はあるが、学生の名前や次の授業のことなど意外とやることは多い。そのためできる限り勉強し、自分がどんなことをしたいのかあらかじめ決めておくことが重要であった。また、四六時中日本語教室の学生がサポートしてくれるため、たくさんを知ることができ、またかなり仲良くなれる。私は 8 日間しか滞在できなかったが、別れが非常に辛かった。

◆ 今後の展望

私は「世界で戦える能力」を身に付けたく、このプログラムに参加した。そして、このプログラムを通じて、インドネシアを含む東南アジアの発展の力となれる人間になりたいと強く思うようになった。

私は山形大学の「地域に根ざし、世界を目指す」というスローガンが好きである。一見両極端なことを目指しているように思えるが、地域や海外に積極的に出て、多くの人と出会うことで自分の個性を知ることができ、自分の目標が生まれると思う。自分の目標を立て、そしてそれを達成するために日々の努力を怠らないことを私は山形大学で学ぶことができた。今後は就職し働くことになるが、自分自身の芯を忘れずに日々精進していきたい。

◆ 最後に

私が初めて国際交流室のお世話になったのは学部 3 年のころであり、大学院 2 年の現在まで 4 年間も図々しくお世話になりました。国際交流室のおかげで多くの方と出会い、怠惰な人間であった私が前を見て努力することの面白さを知ることができました。この場をお借りして心より御礼申し上げます。そして、いつも我儘ばかり申し訳ありませんでした。

今の後輩たちは私なんかよりも非常に優秀で、きっとすでに自分の思うように努力を始めているのだと思います。是非、学生大使プログラムに参加して、別の国の学生とたくさんコミュニケーションしてみてください。きっと有意義な時間になると思います。**Jangan bolos!!!**(休んでいる暇などない)